

2010 年度共同利用・共同研究課題申請書（新規）

申請者(主査)： 椎野 若菜

1. 共同利用・共同研究課題名	
和文	「シングル」と家族——縁（えにし）の人類学的研究
英文	'Single' and Family : The anthropological study of "Enishi (karmic/relation/connection)
2. 研究期間	2010 年度～2012 年度 （ 3 年間計画）
3. 共同利用・共同研究課題を実施する専任教員	(氏名) 椎野若菜 (役割分担) 研究会運営、研究総括、 日本・ケニア・ウガンダにおける「シングル」と家族研究
(同上)	(氏名) 西井涼子 (役割分担) タイにおける「シングル」と家族研究
(同上)	(氏名) (役割分担)
4. 共同研究員採択数	20 名
5. 共同研究員に求められる役割分担	調査研究を行っているフィールドにおける「シングル」と家族についての研究。当該社会において形成された理想の、心象的な、またステレオタイプとして形成された家族、親族像、また国家がつくりあげる家族像などについての調査研究。
6. 共同利用・共同研究課題の概要（400 字程度）（※要覧等広報の際にも利用・掲載します。）	
<p>本研究は「シングル」とされる人間の存在とその生き方について、それと相反し強化しあうかのような存在である、当該社会における家族親族、またくわえて個々人に少なからず影響を及ぼす国家の存在との関係性を念頭に、縁（えにし）という言葉を手がかりに社会-文化人類学（以下、人類学と記す）の立場から追究するものである。</p> <p>現代社会における個人の生き方は多様化してきている。出稼ぎ、単身赴任、留学、宗教的理由、また被災、少子高齢化といった要因で頻繁に人は移動し分散し、こうした社会的環境の変化によってライフスタイルや人と人との関係性も大きく変化している。いったん崩壊したかにみえた近代家族だが、それをモデルにした擬似的な「家族的」なものを求め、近年、人々がつながりだしている事象がみられる。</p> <p>以上のような現代の事象をもとに、本研究はアジア・アフリカを中心に家族、社会の実態と、それらによって創出されたとも考えられる「シングル」の生きる戦術を明らかにする。さらにこうした作業により、固定されがちなシングルに対する現代的な社会理念、シングルの存在の対として位置づけられがちな理想像として生産される家族（像）について、人類学の立場から検討する。</p>	
7. 研究の目的（400 字程度）	
<p>どの社会にも理想の、心象的な、またステレオタイプとして形成された家族、親族像、また国家がつくりあげる家族像などがある。おもにアジア・アフリカ地域の各社会における典型的な家族像などからはみだした／はずされたとされることの多い「シングル」に注目し、その社会的位置や生活戦術を描こうとするのが、本研究の目的である。そういった既存の像が個々人の生き方の選択に大きな影響を与えていることは明らかであり、またそれらと人々の生活実践における家族・親族のあり方との間にはギャップがある場合も多くみられる。したがって、こうした像はどのように語られ、形成されてきたのか、社会的経済的、政治的、歴史的背景をもとに分析する必要がある。以上に注目し研究することにより、当該社会の人々の生活実践における家族・親族のあり方とシングルの関係性の実態、また既存の像とは合致しないシングルのあり方を考察することができる。その際、「縁」という視点から世界各地の人と人のつながり、家族親族のあり方を捉え直し、人類学における家族研究の現代的意義を確認すると共に、その新たな地平を見出すことを目的として掲げたい。</p>	

8. 研究の意義、特に共同利用・共同研究として展開することの意義（400字程度）

現在の日本における人類学は、研究トピックが細分化し地域研究への偏重度が強くなり、逆に他地域との比較という視点を軽んじる傾向にある。また、応用人類学的な、開発政策に関わる実践的な研究が多くなり、本来はそうした研究にとって前提であるはずの家族や親族に関する研究が著しく減少、低迷している。しかし人間の学である人類学において家族・親族のありように目をむける研究の存在意義は、社会人類学が学問として始まったとき以来変わらず重要であると私は考える。

本研究は、従来の親族研究の問題点でもあった人類学における西洋主導を乗り越え、しかしこれまでの蓄積、たとえばカーステンの relatedness など念頭におきながら、日本語として用いられる「シングル」について、また「家族」という基礎的な用語について、そして血縁、地縁、社縁などさまざまな形で用いられてきた「縁」という語を手がかりに、家族親族について、人類学的な研究を新たな次元の展開に導く意義を持つ。人類学のひとつの大きな拠点である本研究所において、複数の人類学者がこのトピックについて共同研究を行うことは、人類学界における家族親族の研究分野のプレゼンスの向上をはかるという点で、かつ本研究所のプレゼンスを高める点においても、大きな意味がある。

9. 共同利用・共同研究として期待される研究成果、および共同利用・共同研究効果（400字程度）

本研究では、アジア、アフリカを中心に世界各地のさまざまな社会で実地調査研究を行ってきた人類学者・社会学者が、各人の調査国、分野からの知見をあわせて共同研究することによって、広い視野からの議論と、フィールド経験を活かした具体的な実践的研究の展開と成果が大いに期待される。また本研究を共同研究とすることにより、共同研究員の調査対象とする世界の地域文化の比較が可能となり、従来の分析概念を再検討する視角を切り開くことができる、という研究成果が期待できる。科学技術の発達により時空間が短縮され、地球上でトランスナショナルな状況が加速する一方で、人々は多岐にわたるつながりを求めるようになってきている。こうした現代の状況を踏まえた文脈で、社会人類学において人間社会を思考する際の基礎となってきた家族親族についていまいちど問うことを試みつつ、「シングル」について考察する研究のスタンスは、変化の著しい現代社会が生み出す様々な状況を読み説く視点を研究者側から日本一般社会に提出することになる。

くわえて、目まぐるしく変化する現代の人間の動態にあった新たな研究視点と方法の提示を、日本だけでなく、英語圏の人類学アカデミズムへもアピールすることが期待される。

10. 研究の実施計画（800字程度）

【1年目】

<概要> 共同研究員それぞれのフィールドの文脈における「シングル」の現状と、また家族親族の関係性、ステレオタイプや理想的イメージなどについて発表していく。各地域における家族親族に関する人類学的議論のレビューと問題点の指摘を、各人がそれぞれの関心事項にひきつけながら報告発表する。

- ・研究会実施（5回）予定。
4月、7月、10月、12月、2月
- ・HRAFを使った「家族」概念の比較を行うためにウェブ上、文献調査を行う。
- ・大宅壮一文庫において、現代日本の「シングル」にまつわる文献調査を行う。
- ・研究者側の分析概念である「家族」「family」はどう使われているのか、使われてきたかを検討。
- ・各人が実際に調査した社会について調査・分析したとき、たちあられてくる家族像や親族像について報告、議論。
- ・HPの立ち上げを実施する。

【2年目】

<概要> 引き続き、メンバーのフィールドの文脈における「シングル」の問題、家族親族との関係性、人類学における家族親族に関する議論のレビューと問題点の指摘を各人が報告発表する。

- ・研究会実施（5回）予定。
4月、7月、10月、12月、2月
- ・HRAFを使った「家族」概念の比較を行うためにウェブ上、文献調査も引き続き行う。

・サブスタンス、ネットワーク、居住形態、経済、自立、扶養、介護、相続、土地、法律、ジェンダー、といったキーワードを基に家族親族のありかた、変化を考証する。

【3年目】

＜概要＞ メンバーではカバーできない地域、家族親族に関するテーマで研究しているゲストスピーカーをまじえ、さらなる議論展開をはかりつつ、議論の総括を行う。文化人類学会、比較家族史学会、家族社会学会などの学会において分科会を組織し研究成果発表を行う。

・研究会実施（5回）予定

4月、7月、10月、12月、2月

以上のように各人の発表と議論の積み重ねをもとに、商業出版にむけてさらに議論を重ね、執筆、発表、編集作業を進める。

11. 研究成果の公開計画（200字程度）

・本研究課題のHPをたちあげ、毎回の研究会の予定や要旨を公開し、つねにオンタイムで何が行われているのかがみえるようにする。

・日本文化人類学会や比較家族史学会、日本社会学会などで分科会を重ねたうえで、その成果を日本で商業出版し、一般向けと、また隣接分野を視野にいれた論集を編み、世に問うことを目的とする。

・HPは英語版を作成し、国際的なジャーナルにも投稿し、日本の人類学者によるシングルをめぐる家族親族論の展開を発信していく。

12. 応募者に求める提出書類

（1）応募者のこれまでの調査地域における研究トピックから、本研究課題の目的にあわせた、今後の研究予定。

（2）本研究課題にむけた期待。

（3）本研究課題に関連する、これまでの研究業績一覧。

（1）、（2）あわせて800字程度。